
Cou Le Nae

手回しオルガン弾き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C o u L e N a e

【Nコード】

N 6 7 3 3 Z

【作者名】

手回しオルガン弾き

【あらすじ】

C o u L e N a eとかそんなんです。

Coule Nae

彼女はそこにいた。ほかにどこにいるというんだろう。僕には想像もつかない。

時間はもう過ぎていた。もう始まっているはずだった。立ち尽くす人々の前に、彼女はいるはずだった。白い肌と、くすぐったい長い髪の毛と、赤ん坊の指みたいな肩と、それから生きることに対する上目づかない嘲笑と、からかうような小さな鼻と、あざけりと、ゆるやかな時を持つて。雨が降りそうだった。西からやってきた、都会を腐らせる古びたスモッグだった。夜はアルコールの湿気を含み、明かりの助けを借りて狂騒的に波打っていた。ここは静かだ。まだ誰もいない。もう少ししたら、彼女を見終えた人々がここに溢れるだろう。それまではひんやりと静かだ。

クラブの中に入ると、停滞したざわめきを感じた。暗さはいつも通りだった。ごつごつした機械じみた天井から降りてくる暗闇は不潔で生温かったし、集まった人々が互いに必要とする、わずかな肩と肩の隙間は敏感な苛立ちを含んでいた。足下にすでに吸い殻が散らばっている。暗闇は雪だった。ゆっくりと、誰にも気づかれないように。その点で雪と違ったけれど。人々の肩や、襟の隙間や、スニーカーの編み目や、僕の爪の上へと、積もって行った。静かで確かな移り変わり。僕らは気づかないほどゆっくりと色あせて行く被写体みたいだった。雪の中、遠ざかる船を見送りに来た村人みたいだった。けれど、何かが違った。いつもと少しだけ。少し壁紙がはがれかけている壁も、人々の手あかでペンキの欠けたポールも、足跡だらけのスピーカも同じだったけど、何かが。それはここに

る人々の意識だった。柔らかくもろい、感情の部分だった。彼らはそわそわとなにかを伺っていた。なにをだろう。この人ごみの向こうには、彼らをつま先立ちさせ、ふらふらと肩越しに首を振らせる何かがあった。ほとんどすべての人は黙っていたけれど、人が集まると必ずそうなるように、どこかで数人のグループが囁いていた。彼らは自分たちのささやきがほかの黙っている人々の耳に入ることとどこかで期待していた。囁きは大きくなり、くすぐったような笑い声とともに注意があり、それから再び小さくなった。僕は人との隙間を無理に抜けて行く。ダウンを着たままの男の脇腹を抜けると、服の擦れる素早い音が聞こえた。それからグラスが合わさる音。人ごみは密接に関係し、それぞれがつながりあっていた。僕が起こした波紋は遠くに波及し、フロアの隅にいる暗闇に舌打ちを引き起こした。彼らは影だった。僕は異邦人だった。彼らは正面の光を背景に、ぼんやりと揺れる、意思を持たない黒い煙だった。なにも始まらないこの景色と反対に、光はいくつもあった。白い光も、赤い光も、ときどきは紫や緑の光も。だからと言って僕は少しも満たされなかった。ただ光は、そのときどきで、僕らの気持ちと無関係に大きく跳ねたり、集まったり、散らばったりした。光はそれだけで一つの情景のようだった。遠い牧草地で行われる、静かな感情の繊細なやり取りのようだった。僕は少しずつ人の間を抜けて行く。足と足の隙間を飛び越えて行く。

彼女はステージにいるみたいだった。姿は見えない。近づくに連れて声が少しずつ大きく聴こえた。まだ幼さの残る詰まったような甘い声だった。

「……それじゃあ、広島から……？」

声は僕にまで届ききらなかった。僕と彼女の間にある暗い床に落ちてしまった。それらを拾い集めるみたいにして、僕はもつと前進しなくちゃならなかった。

「……広島の……から……？」

「……じゃない……に……それで、東京に……」

「……は？……に行つたつきり……たしか……」

「……知つてる、そう、あいつはあれつきり……」

「……そう……あのときは……」

「……も無理は……わけじゃ……」

「……ええ……かも……」

彼女の声が聴けて僕は嬉しかった。子供の頃に好きだった缶詰の特別なクッキーを思い出した。今は名前も思い出せない、海外の言葉で書かれたうす茶色い缶詰。彼女はもうすぐそばだった。もうすぐ彼女の甘い鼻にかかった声を、ひとつ残らず聴くことが出来る。僕は速まる鼓動とは反対に、人を越える速度をゆるめ、フロアの先頭に辿り着こうとしていた。人々の垣根の向こうに、彼女がいて何かを喋っている。彼女の声だけが聴こえる。姿は見えないけど、声だけが。

「……知つてる、そう、あいつはあれつきり……」

二人は声を立てて笑った。

「知つてる？」

これは彼女の声。

越えられない最後の一群があつて、僕は彼らを迂回しなくちゃならなかった。僕は人々が作る、波のように歪んでいる背中の壁に沿つて、急いでフロアを横切つていく。人々の頭の影が途切れるところで、何度も彼女を振り返つた。その度に、彼女の溢れる髪や、白い指や、爪や、微笑みが見えた。僕は爪先立ちになり、ゾンビみたいに左右に揺れる。それから名残り惜しそうにその場を去り、また急いで歩き始める。振り返るたびに、彼女の姿は少しだけ遠のいた。

「……嘘でしょ？」

僕が人ごみをかき分けて最後の一群を越えたとき、彼女はそう言った。それから笑った。彼女は暖かなオレンジ色の膨張した光の中にいた。ステージのポールに腰掛け、見上げる一人の男と話をしていた。いつもと同じ彼女だった。気怠そうで、長くたつぷりとした髪のあいだで、眠気と戯れているみたいで、いつもの彼女だった。

「ホントにそう、子供の頃は」

彼女の声。なんの障害もなく僕に届く、完璧な彼女の声だ。

「そう、あめ玉で泣き出しちまうような」

「キャンディ・ローズ！」

彼らは笑った。

「よく覚えてるな」嬉しそうに男が言う。

「なにしてるのかしら」

「二年前に会ったときは、なにか販売を」

「販売？」彼女は垂れた髪を後ろへやる。「怪しい」

「怪しくない」

「なんの？」

「たしか、そのときは　コピー機って言ってたかな」

「今は？」

「今も販売。ただし怪しい」

彼女は笑う。「何を売ってるの？」

「怪しい水」

二人は笑った。そして静かに微笑み合った。彼女は手を差し出すと男と親しみのこもった握手をした。

立ち上がった彼女は光の中で、輪郭を淡く瞬かせ、光の中に消えていこうとしているみたいだった。彼女は眠たそうに微笑んだまま、しばらく男を眺めていた。ここに集まった僕らは身じろぎも出来なかった。彼女は立ち上がっただけだった。長くたつぷりとした髪を、ただ少し溢れるように揺らせただけだった。髪の毛の一本一本や、胸のあたりにある小さな骨のくぼみや、ドレスの腰の曲線に沿って光をちらつかせただけだった。それだけだった。それだけで僕らは動けなくなった。

彼女は腰の辺りで小さく手を振る。

それから、ようやく　ステージの中央に向かって歩き始める。僕らがここで待ち続けていることは、彼女の心配の種にはならない。多くの熱っぽい視線も急かしも、彼女には気にならない。僕らだっ

たらつい考えてしまう、嫌われるという恐れも、彼女は抱かない。ゆったりとした、酔ったような歩き方をする。足音が鳴る。しとしと濡れる、湿っぽい足音。彼女がかかとを床につき、つまさきを離すたびに僕は柔らかな彼女の性器について考えた。つるつるとした、陶器のように美しい滑らかな性器を。肉付きの良い女ではなかった。胸や尻に男を魅了するような脂肪がついているわけではなかった。ただ、向こうが透けるほど薄く白い耳と、そこから胸元まで続く乱れのない一本の美しい線があった。皺の一つもない長い首筋とひんやりと冷たい広い胸元があった。僕らはみな彼女を見ていた。彼女は誰もみていなかった。僕らを誰一人も。彼女にとっては僕らはみな同じで、僕らにとつて彼女は、たった一人だけの存在だった。その日、彼女は長いむかし話をした。それは夢の出来事のような不思議な話だった。彼女は子供のころの生意気な彼女について話し、意地悪だった友人について、それから街にあるいくつもの坂について話した。彼女は思い出すために話しているみたいだった。僕らは必要だったのかさえわからない。やがて話が終わると、彼女は話しにオチをつけるみたいに、たった一曲だけ歌った。その日、彼女が歌ったのはその一曲だけだった。

これが彼女だ。C o u l e N a eだ。

Cou Le Nae 2

僕は工場にいる。

ラッパ音、サイレンに似た音、それから誰かが作ったそれらしいメロディが流れている。始めのうち、この恐ろしい大音量に僕は心臓が放り出されたような気分がしたけど、今では鳴っていることをほとんど意識さえしなかった。あちこちで人の足音が聴こえる。

工場の廊下は薄暗かった。それから寒かった。ひんやりと冷気が、煙るみたいに染み渡っていた。電気はほとんどどこにもついていない。突き当たりの磨りガラスの向こうで、わずかに冬の日差しが見えているだけで。僕らは明かりを求めちゃいけなかった。ここでは節約が正しくて、明かりは敵だった。事務室にも、トイレにも、廊下にも明かりはない。夜でさえ普通よりも暗く調節された明かりが灯るだけだった。急に音楽が止み、誰かの名前を呼ぶ声がスピーカーから聴こえた。僕の知らない人だ。ここは知らない人だらけだ。しばらくすると、また音楽が鳴り始めた。

「考えてきたか」

すでにトイレの中にいて、用を足しながら黄色い帯を眼で追いかけていたケイスケが言った。

「なにを」と僕。

「なにを、なにを か」

「僕は知らない。なににも知らない」

「そうやってわからないフリをすればいいさ」

「フリじゃない。わからないんだ、事実として」

「事実として、か」

彼は僕の言葉を信じずに、眉を上げる。

「事実をねつ造したいってわけだ」

「お前が捕まったときにも、俺は警察に同じことを答えるよ。なにも知りませんよ僕は、本当です、なにも知らないんですよ」

「事実として、ね」

ふざけたような言い方で彼は言う。

「じゃあ俺の計画には乗らないって言うんだな。大金を手に入れた後で後悔するなよ」

それから彼は、作り上げた犯罪の計画について話し始める。よどみなく彼は語る。言葉につまったり、なにかが思い出せなくて考え込んだりしない。すっかり細部まで作り込まれた計画を、始めから終わりまで話してしまう。彼はいつでも犯罪の計画を立てていた。

僕はいつでも彼の話を聞いた。彼は主婦が宝くじが当たった後を空想するみたいに、自分の犯罪計画について語り、語るだけで満足感を得た。計画は決して実行しない。ラインの内側で、向こう側を空想するお遊びだ。僕はトイレの壁を見ていた。彼もまたやはり見ていた。これは二人で共有する儀式的なお遊びだ。彼は計画を話し、僕は排尿する。煙を立てる。

「それでいいのか」計画を話し終わると、彼が言った。

「それでっていうのは？」

「そのままで良いのかっていう意味だ」

「そのままでっていうのは？」

「人生がこのまま惰性で進んで行くのを、ただ見守るのかっていう意味だ」

「ほかにどうしようもないじゃないか」

「ジャンプするんだよ、遠いどこか、別のところへ」

すっかり尿を出し終えた彼は、僕には見えない位置で性器をぶんぶん振り回すと、ぴちゃぴちゃ音を立てた。ジッパーをあげる音が

聞こえ、彼の臓器からわき上がるうめき声とする。銀色の丸いボタンを彼が押すと、遠く海の向こうから水がやってきて、彼の黄色い形跡を流して行く。僕は身震いする。トイレの水が流れるこの音を聞くと、僕は足下に地獄が広がっていることを考えなくちゃならなくなった。地獄にもこんな滑らかな陶器があつて、みんなが用を足しているんだらうか。

「ジャンプしなかったらー」

彼は言った。その日の彼はいつもと違った。ただの空想を話しているのとは違う、なにか、決断した跡のようなものが見えた。唇が震えていたのは寒さのせいだけではなかったのかも知れない。

「ジャンプしなかったらー永久にそのままだ」

彼はいろんなことに不満があるみたいだった。今の生活に対して、それからこの工場での勤務について。彼が信じる自分の位置はどこか素晴らしい上流階級だった。現実はこちらだった。勤務中にときどきズルをしてトイレに行くのさえ喜びに感じる、狭苦しい規律の中だった。彼がどうして、自分をそんなに過大評価しているのかはわからなかった。いつも隣にいる僕がその感覚を考えるには、彼にはどうやら強い確信があるみたいだった。事実や客観的な条件なんかじゃない。ただ確信がある。彼が信じていたのはそれだけだった。身体の中に指を入れて、手探りで真実に触れたみたいに、彼は自分の抱くその確信を強く信じていた。確かに俺はここにいる、何か高い目標があるわけでもない、なにかに恵まれているわけでもない、これまでの人生で誰かを遠く引き離すような素晴らしい結果を残したことがあるわけでもない。けれど俺は確信している。俺はこんなところにいるべき人間じゃない。彼はそう思っているらしかった。

彼は順応力とでもいうべき、僕の樂觀性についてもいらだっていた。僕がここでの生活にすっかり慣れて、とつくに自分を変革させることを諦めていたからだだった。彼が言うには、僕もこんなところにいるべき人間じゃないらしかった。こんなところにいるべきじゃ

ない人間が、じたばたもがきもせずに、奴隷のような今の生活に甘んじていることが彼には許せないらしかった。彼の中には不思議な階級意識があった。それを決定づける条件は彼にしかない。

例えば、部署のまとめ役に僕が怒られたりなんかすると、彼にはそれがひどく気に食わないしかった。なんだってあんな毛の薄いラシクの低いやつに　彼はこんなふうに、人を“低い”か“高い”

で語るのだった　いいようにされて平気でいられるんだ。彼は僕に向かってそう言った。「アイツが同級生だったら、きっと俺たちには頭が上がらなかったはずだ」これが彼の口癖だった。僕には彼の持つ確信や、人々を社会とは別の仕組みで再編成する能力が備わっていなかったから、ただその言葉の余波を感じるだけだった。そういう感じ方もあるのかも知れないな、僕はそう思うだけだった。

そういう彼の思考とは無関係に、彼の身体はどうしようもなく工場に順応していった。工場の自虐的な節制と、一秒まで定められたスケジュールと、ランダムに演奏する工場のプレス音に。

「おい　頼む、そんな風に水をたくさん出さないでくれ！」

手を洗う僕に向かって彼は言った。すでに手を洗い終えて、わずかに開いた窓から外の空気を嗅いでいる。彼は自分でも気づかないうちに、必要以上という贅沢が許せなくなっていた。あちこちに張られた工場の張り紙のせいだった。

「出してないよ」

「出し過ぎなくらいだ！」

「手を洗えないよ」僕は笑う。

「少しでいいんだよ、少しで！頼むから　少しに！」彼は言った。「水が大量に出ているのを見ると、ハラハラするんだ！」

トイレからの帰り道、僕らは自分たちの部署に回り道をして帰って行く。一番近い道を選んだりしない。足がすっかり覚えてしまったから、僕らはどちらも無言で、なんのサインもなく並んで道を選択する。小さく泡立った緑色のボードを過ぎ、正門に射し込む陽の光を磨りガラス越しに見つめ、来客用の高い渡り廊下から、すでに

部署に戻り働き始めている灰色の彼らを見渡した。彼らは似たように不機嫌で、眠たそうに疲れていた。ひげを毎日剃るのは諦めていた。これが僕らだ。巨大な画面みたいなガラスの前で、僕らはいつも立ち尽くした。

「本当に乗らないんだな……俺の計画に？」

彼は言った。

「乗らない……」僕は一瞬、躊躇した。彼の言葉があまりに真剣だったからだ。「今よりも自分を下げたくないんだ」

「浩二の　　浩二の話しは聞いた？」

「いや」

「昇進したよ」

「まさか！」

「本当だよ、信じられないけど本当だ」

ケイスケはしぶんそのことについて考えてきたみたいだった。

僕に話すまえに、さんざん悔しい想いをしてきたみたいだった。僕はテレビを見ながら、映像が頭に入らないケイスケを想像した。狭い部屋と、いつも誰か来客が来そうな雰囲気にはびくびくしているケイスケを。

「たった二年でだ」彼は言った。「俺はもう三年だ。なにか特別悪いことをしているわけじゃない。あいつが特別優れているわけじゃない。それどころかわざとらしい愛想がうまいだけで　　。クソッ、俺たちは未だにセミ・スタンダードだっていうのに　　」

「待ってくれ！」僕は慌てて言う。

「なんだよ？」

彼は顔をしかめて聞いた。

「なあ……」僕は一瞬、言おうか躊躇した。

彼はわからずに僕の言葉を待っている。

迷ったけれど、僕は言うことにする。

「なあ……僕はセミ・スタンダードじゃない。スタンダードだ」

「おい　　彼は笑いかけた。」

「待つてくれ！」僕は急いで言う。「くだらないさ、くだらないよ、確かに。けど」

「スタンダードもセミ・スタンダードも同じじゃないか。給料も、やっている仕事も、扱いも。こんなもの、会社が俺たちを少しでもおだてて、奴隷意識をごまかそうとしているだけの建前じゃないか」彼は笑いながら言った。

「知ってるさ、そんなことはもちろん」

「勘弁してくれよ……」

彼はおかしそくにそう言う。

「そうだとすると」僕は少し苛立つて言う。「そうだとすると、せめてスタンダードになつてから言うてくれ」

彼は笑うのをやめて、しばらく僕を眺めた。僕も彼を見ている。

僕は苛立つていた。けれど、彼は怒っているようには見えなかった。彼は悲しそうに見えた。もしかしたら、あれは憐れみだったのかも知れない。まるで遠い夜に浮かぶ火事を見つめているような、そんな顔だった。僕を哀れんでいるとは思いたくなかった。せめて苛立つて欲しかった。彼の瞳は、左右に揺れていた。

「確かにくだらないけど」僕は言った。「ここじゃ数少ない楽しみの一つなんだ。お前の言うように、僕らは知っている。この階級が、工場が用意した子供騙しのエサだつてことも、実質上なんの意味もないことも。けど、実際に、僕らはそれを楽しみにしているんだ。プライドを慰めてくれて、惨めさを忘れさせてくれる数少ない」

「お前がもし本当に、そんな風に自分の境遇がみじめだと思っているなら」

彼は僕の言葉を遮ってそう言った。それから浩二に対する長い悪口を。彼は僕らを出し抜いて昇進していった浩二が気に食わないいらしかった。たしかに、浩二には僕らをいらつかせるなにかがあった。それは突き詰めて言うなら、わざとらしさだったのだと思う。浩二はなにをするにもわざとらしかった。彼が上司におべっかを使うの

も、一生懸命働くのも、疲れた表情を浮かべるのも、全部がわざとらしく見えた。けれど、そう思っているのは僕とケイスケだけじゃなかった。あらゆるこの従業員は、彼のそうしたわざとらしい行為を、額面通りに受け取るのだった。彼は真面目で正しい人間だよ、人がそう言っていると僕は黙るしかなかった。

「ジャンプするんだよ、遠くに、今いるここではないどこか遠くに」

彼はそう言ったんだ。僕に決断を迫るように、わずかに怯えた調子で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6733z/>

Cou Le Nae

2011年12月26日21時50分発行